

特報

発電所美術館

富山県入善町

「規格」にとらわれない「企画」

五万頭の蚕(かいこ)が繭となり、作られた銀色の大きな壁面。窓から差し込む秋の日差しに照らされた壁面が、幻想的な世界を生み出す。「生成のプロセス」を重んじるアーティスト、角永(かどなが)和夫氏(石川県金沢市在住)の個展「SILK」が十四日、富山県入善町の発電所美術館で始まった。期間中に、サナギから蛾(が)に羽化するまでも展示するというユニークな個展だ。「規格」にこだわらず作家の創作活動を尊重する同美術館の姿勢が、実現を可能とした。

(編集委員・鴨野 守)

角永氏は米国を拠点に、長く欧米で作品を発表、美術関係者に衝撃を与えてきた造形作家。木を与えた。

の丸太や竹を薄くスライスし、再び原形に戻して提示する作品で脚光を浴びた。また一四五〇度の高熱で溶かしたガラスをゆつくりと垂れ流して、渦巻き状の固形を制作するなど独特の作風で知られる。作品は欧米の美術館をはじめ、石川、富山の美術館に所蔵されている。当初、発電所美術館は氏にガラスの作品展示を依頼したが、角永氏は「繭の作品を作りたい」と提案。実は二十年前、米国で細分化された格子状の木枠に十二万頭もの蚕を生きたまま放し、繭

所美術館の壁に縦八、横四のアルミパネル三枚を設置するため、トラックで美術館内まで乗り入れた。中では重機も動かし、パネル固定のために、床に穴を開けた。「米国では作家のために、壁や床に穴を開けてくれる美術館も多いが、日本ではあまりに規制が厳しい(角永氏)中での美術館側の対応を賞う。

さらに今回の個展の場合、蚕の糞尿やにおい、死骸、また蛾になって出す鱗粉(りんぷん)など、さまざまな「副産物」も生まれる。「それでも作家の創作と発表のチャン

5万頭の繭が作る「銀色の壁」

蛾に変わるまでを展示



5万頭の繭で作られた巨大な「銀色の壁」に見入る親子。14日午後4時すぎ、富山県下新川郡入善町下山の発電所美術館で

世界の雨を実現する「個展」など、挑戦的な企画を打ち出してきた。

スを与えてもらい、本当にうれい」と喜ぶ。「繭の壁は、美術館のすりガラスを通じて入る日差しで微妙に変化し、夕日の時はほのかにピンクに染まる。訪れた人は「圧倒されますね」と、その幻想的な光景に驚いた様子で見入っていた。発電所美術館は、取り壊し予定だった大正十四年建設の水力発電所を、町が北陸電力から譲り受けて平成七年に開館した。発電所の面影を残す形で改装し、敷地内のアトリエなどで作家の制作場面を公開するなど、新しい試みを展開。九月下旬までは著名な彫刻家、遠藤利克氏が、館内の天井から幾筋もの細い水を落とす音の演出で「精神洗練され、商業主義的イベントに傾く美術館が多い中で、発電所美術館は、現代作家を育てていく上でも貴重な存在と言える。角永氏の個展は十二月十七日まで。